

1年 国語 平安時代に時間旅行！？名作「竹取物語」の秘密に迫る！！（いにしへの心につれる・謎の玉の枝）

1 単元構想文

単元目標

- ・音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむことができる（知識・技能）
- ・場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉えることができる（思考・判断・表現）
- ・物語の読解を通して、古典作品の魅力について語り合おうとする（主体的に学習に取り組む態度）

単元について（下線：主なてだて）

本学級の生徒は、「ちょっと立ち止まって」の単元において、既習内容をもとに作者の主張の伝え方について考えることができた。しかし、生徒たちは与えられた問題への取り組みに留まり、自分で問題を見つけて追究する活動は行っていない。自分で追究していく問題を設定できれば、生徒はより主体的に学習に取り組めると考える。また、生徒は小学校で「枕草子」や「平家物語」という古典作品にふれてきている。しかし、自分に引き寄せて共感的に読んだり、現代との違いに目を向けて読んだりするなどの古典文学のおもしろさに気づいている生徒は少ない。本単元では、生徒自らが疑問をもって追究していく中で、古典文学のおもしろさに気づくことを期待している。

本単元では、現存する日本最古の物語だと言われており、生徒には「かぐや姫」という題名で幼い頃から慣れ親しまれている「竹取物語」を教材として扱う。かぐや姫の正体が「月の都の人」であるSF的設定や恋愛模様を描く内容は、生徒たちが興味をもちやすく楽しめる。また、当時の風俗を描いた関連図書や教科書本文以外の原文と現代語訳にふれることで、古典文学の世界により浸ることができる。「竹取物語」は、生徒が自分たちで疑問を設定し、追究していくのに適した教材であるといえる。

見いだす段階では、千年以上前に書かれた現存する日本最古の物語を読むことを伝え、崩し字や変体仮名で書かれた「竹取物語」冒頭の原文を提示する。多くの生徒は、日本語で書かれているのに全然読めないという経験をするだろう。その後、原文をいくつかにわけ、グループごとに解説したものをつなぎ合わせることで、「竹取物語」の冒頭部分に改めて出合わせたい。冒頭部分の音読や現代語訳の確認を通して、生徒は「どこかで聞いたことのある話だ」「かぐや姫に似ている」という感想を抱く。そこで、昔話「かぐや姫」はどんな物語であったのかを生徒自身が語る場を設定する。多くの生徒があらすじを知っていることを確認したり、読み聞かせの経験を振り返ったりすることで、「かぐや姫」即ち「竹取物語」が現代を生きる私たちにも身近な作品であること、千年以上も前から形を変えて読み継がれてきた作品であることを生徒は実感する。すると、長い間読み継がれてきたことに感心したり、疑問をもったりする生徒が出てくると予想する。解き明かす段階では、「竹取物語」が長い間読み継がれてきた秘密を探るために、「竹取物語」の登場人物や作者にインタビューをするという言語活動を設定する。まず、教科書に掲載されている原文やあらすじをもとに、「竹取物語」の話の大筋をつかむ。そのうえで、出てきた疑問を登場人物ごとに整理する。生徒は登場人物ごとのグループに分かれ、その登場人物になりきって出てきた疑問（謎）に答えられるように追究をすすめていく。その際には、「竹取物語」全文の原文と現代語訳に加え、現代作家の訳した「竹取物語」や平安時代の文化や生活について書かれた図書を用意することで生徒の追究を支える。謎を追究していくことで、生徒は「竹取物語」の原文や現代語訳を繰り返し読み、物語のおもしろさに気づいていく。また、グループで追究したことを全体に発表し共有することで、生徒は自分たちだけでは気づけなかった「竹取物語」の新たな一面にふれ、より深く作品を味わえるだろう。そして、作品の魅力を改めて感じるであろう。感じた魅力を共有していく中で、自身の読書経験や生活経験をもとに魅力を語っている生徒の意見に焦点をあてることで、「竹取物語」の魅力は現代の私たちの感覚にも通ずるものだと生徒は気づいていく。動き出す段階では、インタビューで取材したことを新聞記事にまとめる活動を行う。自分たちで追究したことを文章にまとめたり、意見交流後に「竹取物語」の魅力について自分の考えを改めて言語化したりすることで、自分の考えを振り返り、深めることができると考える。また、編集後記として現代の自分の立場で作品を見つめ直すことで、「竹取物語」には現代の自分と通ずる点が多くあること、現代の私たちにとってもおもしろい作品であることに思い至ると考える。「竹取物語」以外の作品ではどうかと疑問をもつことも考えられるため、生徒のよく知る昔話の原典を紹介し、古典作品全体へと興味を広げていきたい。

3 見いだす段階のてだて(浸り場・着火)と生徒 a の問題意識の高まりについて

単元前の生徒 a の姿

- ・小学校で古典に触れてはいるものの、自分に引き寄せて共感的に読んだり、現代との違いに目を向けて読んだりする経験がなく、古典文学のおもしろさに気づいていない

単元の導入では、「竹取物語」が平安時代に書かれたものだ実感できるように、崩し字や変体仮名で書かれた原文を読む場を設けた(てだて A: 浸り場)。生徒 a は苦労しながらも、グループの仲間と協力して原文を読み解くことができた【資料 1】。振り返りには「昔の字は難しいんだなと思いました。今はふつうにひらがなが読めるけど、昔の人は読むだけで大変なのかなと思いました」とあり、「竹取物語」を「昔の人が読んでいた遠い時代のもの」だと捉えていることがわかった。冒頭部分の音読や現代語訳の確認後、生徒 a は「竹取物語はどんな話だったかなと思ったけど、実際はかぐや姫の話だと思いました。」という感想を抱いた。そこで教師は、昔話「かぐや姫」はどんな物語であったのかを生徒自身が語る場を設定した(てだて B: 着火)。多くの生徒が、あらすじを知っていることを確認したり、読み聞かせの経験を振り返ったりしたことで、「かぐや姫」即ち「竹取物語」が千年以上も姿を変え、今も親しまれ、読み継がれていることに気づき、感心していた。それと同時に、「なぜ千年以上もの間、読み継がれてきたのか」という問いも生まれた。

4 解き明かす段階の2つのてだて(浸り場・着火)の検証

(1) 浸り場のてだてについて

見いだす段階での生徒 a の姿

- ・「竹取物語」を昔の人が読んでいた遠い時代のものだと捉えている
- ・一方で、「竹取物語」は自身のよく知る「かぐや姫」だと知り、親しみも感じている

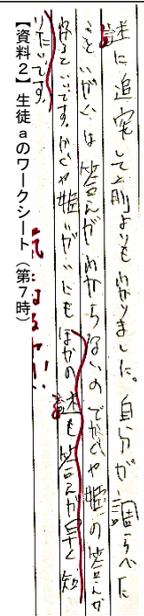
てだて C (浸り場: 考えを深める力)

- ・追究していく意欲がもてるように、グループ単位で「竹取物語」の疑問点(謎)を挙げさせ、登場人物や作者になりきってその謎にインタビュー形式で答えるという言語活動を設定する



【資料 1】 仲間と協力して原文を読む生徒

共有された「なぜ『竹取物語』は千年以上読み継がれてきたのか」という問いに対する答えとして、生徒たちは生徒 b の「『竹取物語』が魅力的な作品だから」という考えを支持した。その仮説が正しいかどうかを検証するために「竹取物語」を自分たちで実際に詳しく読んでいくことになった。教科書に掲載されている内容で「竹取物語」のあらすじを知った生徒たちは、作品に対してさまざまな疑問を抱いた。その疑問を追究し、作品を読み深めていくことが、「竹取物語」の魅力の理解につながると考え、教師は、生徒が登場人物や作者になりきって疑問(謎)にインタビュー形式で答える「記者会見」という言語活動の場を設定した(てだて C: 浸り場)。生徒 a は「なぜ(かぐや姫は)満月のときに帰るのかな」「なぜ(かぐや姫は)三寸なのかな」など、特にかぐや姫に対して関心を抱いていた。そのため、同じようにかぐや姫に関する謎をもつ仲間とグループとなり、かぐや姫に関する謎を追究し、わかったことをかぐや姫になりきって発表することとした。グループでかぐや姫に関する謎を共有した生徒 a は「①: 3 か月で大人になったのにどうしておばあさんになっていないんですか」「②: かぐや姫はなぜ竹の中に入っていたのか」という2つの謎を追究していくこととなった。追究活動の振り返りには、第7時「自分もわからなかったところを調べると出てくるので「そういうこと」と思いました」、第8時「謎を追究して前よりもわかりました。自分が調べたこと以外は答えがわからないので、かぐや姫の答えがわかるといいです。かぐや姫以外にも他の謎も答えが早く知りたいです」とあり【資料 2】、自分たちで挙げた疑問点を追究し、解決していく楽しさを感じていることがうかがえた。以上のことから、てだて C は、生徒の追究への意欲を高めることに有効であり、自らの意志で学びを進め、考えを深める力を高めたといえる。



てだて D (浸り場: 考えを深める力)

- ・「竹取物語」の謎を追究し根拠をもって自分の考えが語れるように、原文と現代語訳に加え、現代作家の訳した「竹取物語」や平安時代の文化や生活について書かれた図書を用意する

【資料 3】 緑の本に載った原文から根拠を探す生徒



生徒たちの追究活動を支えるために、教師は原文と現代語訳の載った冊子(緑の本)を一人一冊用意するとともに、現代作家の訳した「竹取物語」や平安時代の文化や生活について書かれた図書も用意した(てだて D: 浸り場)。はじめは教科書に掲載された内容だけで判断し「月の都の者で人間じゃないから」と謎に対する答えを結論づけていた生徒 a だったが、教師が「その発想、いいね。それって原文だとどう書かれているのかな」と声をかけると、緑の冊子を懸命に読み始めた【資料 3】。その結果、生徒 a は謎①に対する答えとして、「月の人だから月の年のとりかたで年をとるから」という考えをもった。そして、その根拠を原文の「おのが身は、この国の人にもあらず、

【資料4】生徒aの一人調べ
理由 月の都の人だから月の年のとりかたをしていて自分たちとちがうから
かぐや姫は、この月のととととと、月の年のとりかたをしていて自分たちとちがうから
月の都の人は、いとうらに老いをせずなむ

月の都の人なり」、「月の都の人は、いとけうらに老いをせずなむ」という記述から見つけ出すことができた【資料4】。また、生徒aは「竹取物語」の関連図書を読み、『竹取物語』と同じように『桃太郎』『瓜子姫』など、人間でないものから主人公が生まれてくる民話は多くあり、主人公がこの世の人間ではなく、どこか別の世界からやってきた人であることが強調される」という考えにふれた。そのことによって謎②に対する「月の都の者で人間じゃないから」という自分の考えへの自信を強めることができた。その後に行われた「記者会見」の場で、生徒aは他のグループからの質問に対し、個人追究してきたことをもとに堂々と答えることができた。以上のことから、てだてDは、個人の課題を解決したり、根拠のある自分なりの考えを構築したりするうえで有効であり、考えを深める力を高めたといえる。

「記者会見」の場で個々の追究を共有したことにより、生徒たちがあらすじを読んだときに抱いた多くの謎が解消され、「竹取物語」に対する理解が深まった。そこで、生徒bの仮説を検証するために、「竹取物語」の魅力について話し合う場を設けることにした。生徒aは「私は「竹取物語」の魅力はおもしろいところだと思います。わけは、かぐや姫はふつうの人間じゃなく月の都だから（中略）月の年のとりかたをしているところが自分たちとちがうからいいなと思いました」と記述しており【資料5】、今までの個人追究をもとに、かぐや姫と自分を比較し、その違いにおもしろさを感じていることがわかる。

(2) 着火のてだてについて

教材に浸った生徒aの姿

・仮説「竹取物語は魅力的な物語だから読み継がれてきた」ことを検証するための話し合いに臨むにあたって、「(地球の)自分たちと違うところがあるからおもしろい」という考えを構築した

てだてE(着火:考えを深める力)

・「竹取物語」の魅力は現代の私たちの感覚にも通ずるものだと気づけるように、自身の読書経験や生活経験をもとに魅力を語っている生徒を意図的に指名したうえで、他にもそのような経験がないか問いかける

第12時の話し合いでは、「無理難題でもがんばる五人の貴公子の姿」「中国とか月とかスケールが大きい」「帝とかぐや姫の互いを大切に思う関係」「多くの謎があり、調べたり想像したりすることでより楽しめる」などさまざまな意見が出た。生徒aは、生徒cの「かぐや姫が竹から出てくるように、現実ではありえないことが起こるといっておもしろさがある」という意見に続けて「かぐや姫は月の都の人だから自分たちと違うところがおもしろい」と発言した。他にも「舞台が現代ではなく、平安時代であり、その時代の生活や感情を体験できる」や「架空の物語で想像するのが楽しい」など、「自分たちと違うからこそおもしろい」という方向に生徒の思考は流れていった。そこで、当時の感覚と現代の感覚には通じている部分があることに気づけるように、教師は生徒dの「平安時代にも月がどのようなところか想像があったと思うので、月の都やかぐや姫は魅力的だった」という発言を取り上げた。『平安時代にも』ということは今も月に対する想像があるということだよ」と生徒たちに問いかけると多くの生徒がうなずいたため、「どんな想像があるかな」と重ねて問いかけた。すると、「宇宙人がいる」「うさぎが餅つきしている」「月の裏にうさぎがいる」などの意見が出た。「月に対して今も昔もいろんな想像をするのと同じように、「竹取物語」と似た話や似た経験ってあるかな」と尋ねる(てだてE:着火)と、「自販機から百円出てきてラッキーと思うのと、竹から金が出てきてラッキーと思うのは似ている」「かぐや姫が翁たちを大切にされたように、家族を大切に思う気持ちは自分にもある」などの意見が出た。自分たちとの違いに目を向けていた生徒aも「自分がにている話を考えたら自分

5 動きだす段階のてだて(浸り場)と未来を創造しようと動きだす生徒の姿について

単元の終末に、生徒が追究してきたことや「竹取物語」が長い間読み継がれてきた理由、単元を終えての感想などを新聞記事にまとめる場を設定した(てだてF:浸り場)。また、生徒のよく知る昔話の原典も紹介した(てだてG:浸り場)生徒aは、「『竹取物語』の魅力がたくさんあるので他の作品も読みたいと思った。」と単元を振り返り、同じ物語文学である「源氏物語」を手にとっていった。これらの様子から、単元を通して生徒aは古典文学のおもしろさを感じ、古典文学全般への興味関心を高めていることがわかる。

未来を創造しようと動きだす生徒aの姿

・「『竹取物語』には魅力がたくさんあったので他の作品も読みたい」という思いをもち、他の古典も手取り、古典への関心を高めた

【資料5】生徒aのワークシート(第11時)
私は「竹取物語」の魅力はおもしろいところだと思います。わけは、かぐや姫はふつうの人間じゃなく月の都だから（中略）月の年のとりかたをしているところが自分たちとちがうからいいなと思いました

【資料6】生徒aの振り返り(第12時)
自分たちが竹から出てくるように、現実ではありえないことが起こるといっておもしろさがある」という意見に続けて「かぐや姫は月の都の人だから自分たちと違うところがおもしろい」と発言した。他にも「舞台が現代ではなく、平安時代であり、その時代の生活や感情を体験できる」や「架空の物語で想像するのが楽しい」など、「自分たちと違うからこそおもしろい」という方向に生徒の思考は流れていった。そこで、当時の感覚と現代の感覚には通じている部分があることに気づけるように、教師は生徒dの「平安時代にも月がどのようなところか想像があったと思うので、月の都やかぐや姫は魅力的だった」という発言を取り上げた。『平安時代にも』ということは今も月に対する想像があるということだよ」と生徒たちに問いかけると多くの生徒がうなずいたため、「どんな想像があるかな」と重ねて問いかけた。すると、「宇宙人がいる」「うさぎが餅つきしている」「月の裏にうさぎがいる」などの意見が出た。「月に対して今も昔もいろんな想像をするのと同じように、「竹取物語」と似た話や似た経験ってあるかな」と尋ねる(てだてE:着火)と、「自販機から百円出てきてラッキーと思うのと、竹から金が出てきてラッキーと思うのは似ている」「かぐや姫が翁たちを大切にされたように、家族を大切に思う気持ちは自分にもある」などの意見が出た。自分たちとの違いに目を向けていた生徒aも「自分がにている話を考えたら自分